



適度の運動と頭を使うことが(健康)の第一歩だね

古い言葉だが 「医、は、仁術、」

和納12区 金子重次郎さん
(明治38年2月3日生まれ)

「原の医者」と呼ばれ、村内ではあまりにも有名な外科医。昭和二十四年から五十九年までの約三十五年間、原で開業していた。新潟市水道町の自宅からの通勤医であった。「若いころは新潟発朝六時前の列車で岩室へ。列車に揺られる三十分あまりが安眠の場とばかりに、ついつい寝過ごし、吉田まで行ったことも十回は下らなかった」と笑う。昨年、和納十二区

の県道沿いに新しく開院、息子さんの和義さんと毎日診察にあたっていている。思うように動かすことの出来なかった体が杖を借りながらも歩くまでに回復した姿を見るたびに、先生の疲れは吹っ飛びむしろ明日への仕事の活力になるという。人間にとって一番の幸せは健康。その大切な(健康)に金子さんは奉仕する。紳士然とした笑顔が患者にやすらぎと安心を抱かせる。



年をとっても、つねに「勉強」するってことが大事だね

自転車を乗りこなす 「ハイカラ、姉さん」

間瀬3区 藤井トミさん
(明治38年7月19日生まれ)

間瀬地区公民館近くにある藤井商店。この店主が藤井トミさんだ。今年八十歳とはとても思えぬ顔の色つやをしている。昔から「浜の衆」とか「浜の女」とか呼ばれ、間瀬の婦人たちは働きもので知られていた。藤井さんも現在の商売を始める前(昭和二年ころ)は、とれた魚を町や村に売り歩く「スケゴ(魚の行商)」をして幼ない子どもたちを育て、そして一家を支えてき

た。そのころ村内でもまだ珍しい自転車を買って、後ろにリヤカーをつけて、燕市まで出かけた。その後店を開き自慢の自転車に酒やしょう油を積んで村中を駆け巡った。数年前、寝不足からきた過労で入院してからは、娘さんの玉枝さんが心配して愛車(自転車)を隠してしまっただけ。しかし、今でも乗りたがってしようがないという。小説にも書ける「ハイカラ姉さん」からかな。



ひと枝落とすにも一振り一振り考えて枝下ろしするんだよ

山は生きている—— 子育ての気持ちで

樋曾 三富四郎さん
(大正3年10月29日生まれ)

三富四郎さんは、山仕事半世紀のキャリアの持ち主。現在も所有林や石瀬の寺院の杉の枝下ろしに頑張っている。本来は大工を志したが、折からの不況(昭和九年ころ)で父親の仕事(伐採)を手伝い始め、この道に入った。「山仕事の基礎は父親から厳しく教えられた。でも現在では、わたしを含め十人(村内で)いるかどうか」と後継者難と山の荒れるのを嘆く。普通、

杉の枝下ろしの場合、一番最初に下ろすおび枝、そして二番枝、三番枝(止め枝という)の三回は必要とのこと。「最近では、こんな仕事をする者がいないので、二番枝くらいで終了」と話す。山は足場が悪いため「むかしばしご」という一本はしごを使う。今日もからすどまりを見上げて作業に入る。その日焼けした笑顔の中に、山に働く人ならではのやさしさを見た。

敬老の日特集

わが人生は70歳から

地域で力強く生きる人たち

仕事に、家庭に目いっぱいガンバリ続け、そして迎える老後。「一日五時間、最高八時間テレビの前に座りっぱなし、という「テレビおばあちゃん」、孤独の友は「お酒」とい

うおじいちゃん」と、生きがいを見つけている。年寄りがいます。「老人に達してやっと得ることができる豊富な時間」——その時間を上

手に使い、生活をエンジョイすることのできるのが老後です。それには健康、そして生きがい、この二つが不可欠な条件です。生きていくことの幸せを感じ、充実した生活を創り出すものになるもの——それが生きがいです。囲碁や盆栽、ゲートボールなどの趣味に打ち込むことも、またグループでの旅もそのひとつです。そして一番なのは仕事。仕事を通して社会の一員であるという実感を味わう、そこには仕事を生きがいとする「気持ち」があります。仕事をすることで、まさに「黄金の時代(ゴールデン・エイジ)」とはりきるお年寄りの姿が各地でみられます。今号では、「地域に生きる」と題して各分野で意欲的にがんばるお年寄りのみなさんをご紹介します。